10 設計演習ⅢA 都賀川沿いに建つ＜子育てスクエア＞

開講年次：学部３年生第１クォーター

［担当教員］
槻橋修（准教授）
小林直紀（安井建築設計事務所） 鄭弼溶（いるか設計集団）
［Teaching Assistant］
尾野拓海（A69） 小野原祐人（A69） 柴田貴美子（A69）

■課題概要

現代都市に暮らす人々にとって、子供を産み育てることには様々な課題がある。要因としては核家族化による地縁の希薄化、女性の社会進出による共働き夫婦の増加、単親世帯の増加などが挙げられる。子育ての負担が親に集中することが、都市でのライフスタイルとの間でストレスを生み、育児ノイローゼや幼児虐待といった招かれざる事態の遠因ともなっている。

従来より社会における「発達保障」の場として児童福祉施設は整備されてきているが、現代のような家族観、自然観が多様化する時代において、都市は子供達に、また子供を育てる親たちに、どのような場所を提供すればよいだろうか。本課題では以下に挙げる3つの方向性からひとつを選択し、子供のための空間、都市における福祉のあり方について考えてもらいたい。

(1) 次世代をになう児童達が、健やかに育つための支援環境として、自由に利用ができる施設。
(2) 子育てに関わる様々な人が自由に集まり、交流するための施設。
(3) 乳幼児の発達保障の場、生活空間を提供する施設。

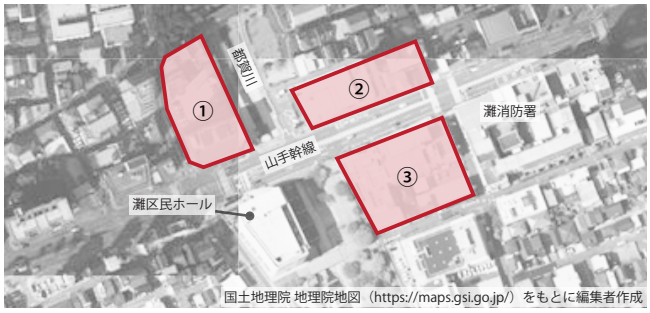
3つの施設が、交差点を中心に子育てスクエアとして一体的な空間をつくるように、それぞれが尊重すべき共通のデザインの方針（デザインコード）を設定することが望ましい。

■敷地

(1) 別図に示すような、灘区都賀川沿いの敷地を想定する。
・「児童館」敷地①約 2030 ㎡＝東西 30m× 南北 70m(変形あり)
・「子育てカフェ」敷地②約 1550 ㎡＝東西 62m× 南北 25m
・「保育所」敷地③約 3100 ㎡＝東西 62m× 南北 50m
・用途地域等 (近隣商業地域 / 建蔽率 80%, 容積率 400%, 防火地域)
(2) 河川公園に隣接する敷地で、周辺は住宅地。

■建物概要

・「児童館」: 延床面積 1000 ㎡前後。構造、階数は自由とする。
・「子育てカフェ」: 延床面積 800 ㎡前後。構造、階数は自由とする。
・「保育所」: 延床面積 1000 ㎡前後。RC 造、鉄骨造、または、木造（準耐火建築物）。階数は自由とする。

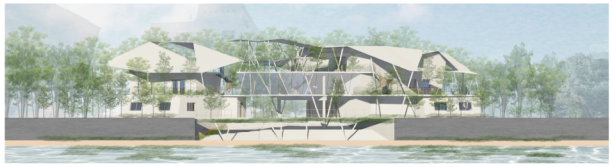


課題敷地

森に浮かぶ膜

庄司創

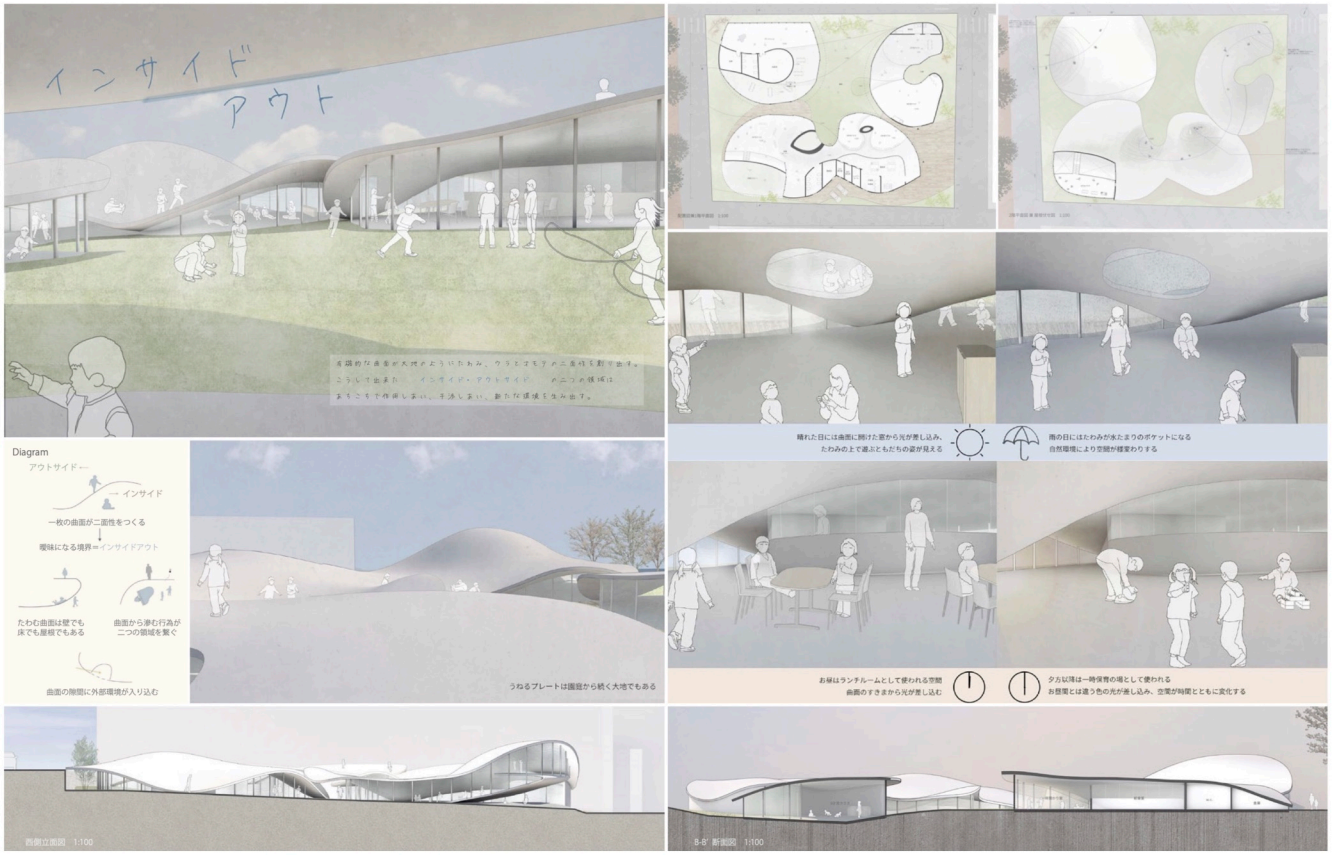
折半屋根を架けた半外部の緑化空間・外構・敷地周辺木々が一つの森を形成し、自然と調和した児童館を設計する。商店街からはアプローチを通し、川沿いまで 下る大階段を設けることで街と川とを立体的につなぐ。子供だけでなく地域住民 も緑を享受しに訪れる建築を目指した。



インサイドアウト

宮本莉奈

有機的な曲面が大地のようにたわみ、ウラとオモテの二面性を創り出す。こうして出来たインサイド・アウトサイドの二つの領域は、あちこちで作用しあい、新たな環境を生み出す。曲面の隙間に切り取られる自然と、インサイドアウトな空間の中で、子どもたちはすくすくと育っていく。



Sense of Wonder

舟木健太郎

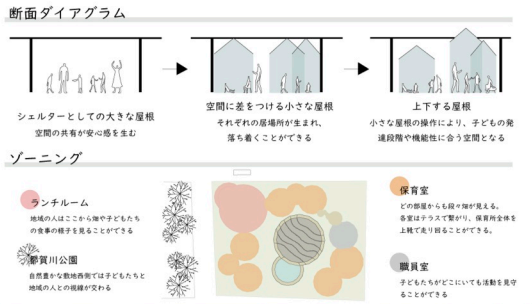
門型フレームが、この世界を額縁のように切り取っていく。そのフレームによって生まれた空間は、子どもたちに、たくさんの出会いや発見、驚きや喜び、ときどき畏れをもたらしてくれるのではないだろうか？というささやかな願いを込めて、この保育園を設計した。

＊パース（左上）や立面図（左下）の敷地の高低差は、国土地理院基盤地図情報基本項目をもとに表現。
＊平面図（右上）は、国土地理院基盤地図情報基本項目に色付けや画像の貼り付けをして作成。

食を育み、人を育む

前田菜緒

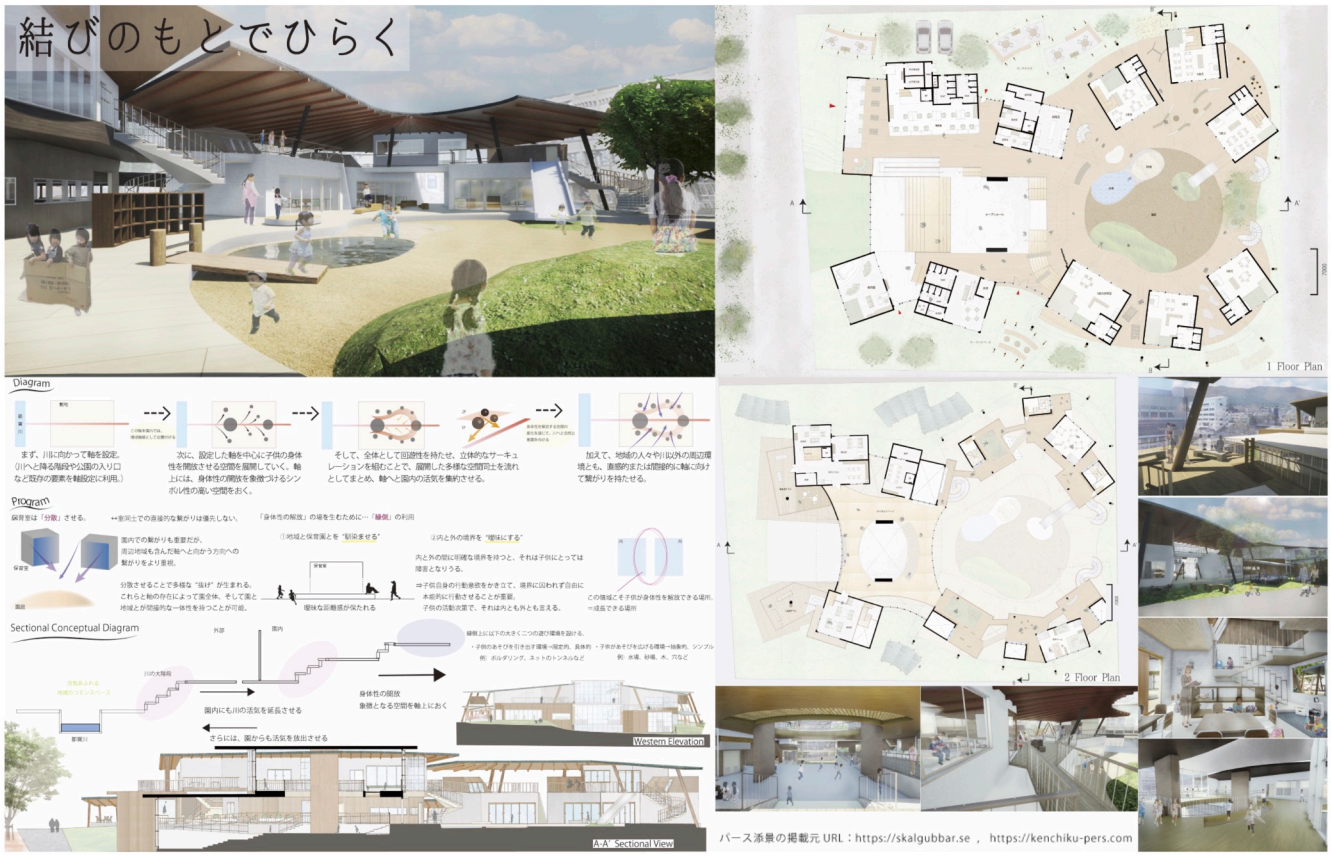
近年、「わざわざの教育」になりつつある食育を、幼少期の「あそび」の延長に仕掛けた。 子どもたちは食物を育て、調理し、食べることを通じ、習慣的に食への興味を湧き立て、食べる喜びや楽しさを知る。地域ぐるみの農作業は交流を促し、保育所は地域の食育拠点としても機能する。



結びのもとでひらく

宇佐美恒

子どもが自らの行動意欲のまま駆け回れる環境を提供してあげたい。 幹線道路や都賀川など賑わいが溢れる環境において、 周辺環境に絡むような活動空間の流れを建物全体に持たせ、 内外において活気の共有ができるような子供の“身体性を開放”を促す保育園を計画する。



パース添景の掲載元 URL：https://skalgubbar.se ， https://kenchiku-pers.com